

臥龍院と“げんだ石”

小京都大洲にある臥龍山莊が注目されている。ミシュランの一つ星ということらしい。個人的には、あまりメジャーになつて欲しい。無き建物の一つだったのだが。



“MY TOWN” うおっちゃん 歩キ目デス & 足ラテス

Vol.56

臥龍山莊の不思議 …大洲市

岡崎 直司

タウンリズム講座主宰・
ヘリテージマネージャー

しかし、明治のご一新で荒れ果て、そこを木蠟業で財を成した河内寅次郎が明治30年頃に購入、構想10年の後、今に見る結構を整えた。



勘兵衛井戸の一つ

勘兵衛井戸と名付けられたのも、やがて加藤家が封された江戸期には、歴代藩主によつて手入れされた特別な場所だった。

かつて全く無名であったこの山莊が、中央で知られるようになったきっかけは、建築家の故黒川紀章氏が大洲に来られた1976年の頃から。氏はその後80年に「新建築」で「臥龍山莊の発見」と題し、「花数寄」という考え方について論述した。91年には彰国社から「花数寄―伝統的建築美の再考」という著述も出版し、この山莊を大きく取り上げているので、余程の気に入りの方であった事が見てとれる。

そうした背景もあつて、82年に市文化財となり、85年には愛媛県文化財となった。

山莊は、戦国期に遡る景勝の地、臥龍の淵に臨んで建てられている。元々、大洲を領していた藤堂高虎の重臣渡辺勘兵衛が屋敷を構えていた場所、その屋敷からの眺めで、城普請の差配をしていたとも伝わる。山莊の周囲三か所に井戸が残り、勘兵衛井戸と名付けられたものも、やがて加藤家が封された江戸期には、歴代藩主によつて手入れされた特別な場所だった。



河内家の家紋「丸に角橋」

数寄家建築の名棟梁八木甚兵衛が指導し、現場では草木国太郎や地元棟梁中野寅雄が腕を振るったが、何よりそれを支える職人集団がプロ中のプロ「千家十職」

の構成だった。モノは人が作るもの。その人の程度で全ては決まる。その意味では、施主の構想を始め最高のチーム編成で施工された建物と庭ということになる。千家十職は、千利休に始まる茶道の世界を支えた職人たちで、数寄家建築においてこれ程の匠の技を究める専門集団は他にない。本来であれば、京都界隈でしか仕事が見られないはずだが、四国の地方都市大洲でその本領を發揮する事になったのは、どうやら時代背景とも無縁ではない。明治の文明開化期は、それまで上流の武士と町人によつて支えられていた「茶の湯」文化にとつては逆風となり、衰退の原因となった。そうした中で、捨てる神あれば拾う神あり。やがて社会が落ち着き始めると、政官財の中から「数寄者」と呼ばれる庇護者が現れることになる。河内寅次郎は、そうしたパトロンの一人でもあつたようだ。臥龍の淵をはさんだ蓬萊島と山莊を合わせて三千坪、主屋の臥龍院と茶室の知止庵、不老庵からなり、吟味尽くされた数寄の風情



入り口の黒門を振り返る、石垣は月、舟の見立て

庭から一段下がった、観光客が見落とす所に面白いモノが立っている。擬宝珠様の親柱が二本、その片方には「藤雲橋」と刻まれている。かつては、臥龍の淵を「またぎ、向かいの蓬莱島に架け渡す」かすら橋があった場所。その名残りであるらしい。近くの大木



藤雲橋親柱



不老庵の手摺



不老庵への配石の妙



石畳み通路の美



光らせた匠技

が、至る所に凝縮されている。庭内には、様々な銘石や各種の飛び石が絶妙に配置され、足の運びが実にスムーズに動く。石を選んで足を置くまでもなく、歩を一步進める先に石が座っている、という塩梅。だから疲れない。

その不老庵の丁度対岸辺りに、当の寅次郎、自得院廉道宗直居士は眠っている。脚光を浴びつつある山荘の現代事情を、彼は今どんな想いで眺めていることだろう。明治23年、37歳の時、同郷の先輩池田貫兵衛（神戸商議所会頭）との合名会社で木蠟精製工場喜

をアレンジしながら、物真似の小品さは微塵もなく、見事に昇華させている。そうしたある種の華やきを、黒川紀章は侘びに対する花数奇と称したのに違いない。

また、中でも不老庵は面白い。肱川に迫り出すように建つ「懸造り」。しかも、その支えとなる柱には、わざわざ松皮を張り、自然木の如く見せている。天井は竹の網代張りで婉曲させて、空間を広く、しかも肱川の水面を反射する月明かりを取り込む意図だということから恐れ入る。

に大きな藤蔓が見られるので、そうしたものが使われていたのかも知れない。

茅葺の臥龍院は、各部屋の用材、建具、それぞれの意匠が細やかな気配りでまとめ上げられ、それを堪能するにはかなり時間を要する。かの桂離宮や修学院離宮などの写し



不老庵・懸造りの様子



不老庵の竹網代天井



多組を神戸に設立し、貿易商として成功を治め、山荘が完成するのが同40年。しかし、念願叶った悠々自適の山荘暮らしは意外に短く、その2年後に56歳で没する。山荘に来て眺める毎に、何故それ程までに彼がここに精魂を傾けたのか、不思議な感覚が消えないまま、今日もここを後にする。